

## 6. SR 神経系の疾患 (I64 脳卒中, G35 多発性硬化症, G809 脳性麻痺)

### 文献

Veneri D, et al.: Using the International Classification of Functioning, Disability, and Health Model to Gain Perspective of the Benefits of Yoga in Stroke, Multiple Sclerosis, and Children to Inform Practice for Children with Cerebral Palsy: A Meta-Analysis. *J Altern Complement Med* Vol.24, Number 5, 2018, pp439-457. PMID:29406768

### 1. 背景

ヨガと脳性麻痺 (CP) 児に関連する研究はごくわずかである。

### 2. 目的

第一の目的は、脳卒中と多発性硬化症 (MS) の大人や子供のヨガについて、国際機能・障害・健康分類 (ICF) モデルの領域とエビデンスレベルを決定することであった。第二の目的は、CP の子どもに対して何らかの推論が可能かどうかを判断することであった。

### 3. 検索法

本研究者は各論文の全文を読み、包含基準に合致する論文について意見の一致を得た。メタ分析では、評価項目(OM)の介入前後平均値および標準偏差を報告したすべての論文を対象とした。

### 4. 文献選択基準

検索対象は査読付の英語による研究であった。検索語の組み合わせは、ヨガと脳卒中、ヨガと脳卒中リハビリテーション、ヨガとMSとした。ヨガと健常児、ヨガとCP、ヨガとCP児、ヨガと障がい児である。9022件の論文が検索され、包含基準に該当する32件を対象とした。このリストはタイトルでスクリーニングされ、重複したものと157までの記事を排除した。このレビューに含まれる論文は、介入としてヨガがあり、身体の構造と機能、身体能力またはパフォーマンス、およびまたはQOLを調べるOMがあった。システムティックレビューを含むものは除外基準とした。

### 5. データ収集・解析

ヨガと当該集団を対象としたシステムティックレビューを実施した。アウトカム指標は、ICFモデルの身体構造と機能、活動性、QOLの領域に従って分類された。効果量 (ES) は、Cohenのdを用いて算出した。結果指標や診断群内、診断群間での結果の報告には共通性がほとんどなく、ESの直接比較は困難であった。そこで、一般線形混合モデルを用いて、対照群や他の身体運動と比較した場合のヨガの影響を評価することにした。

### 6. 主な結果

脳卒中の研究が5件、MSの研究が15件、小児の研究が12件であった。小児を対象とした研究では、身体の構造と機能に関連したアウトカムを用いていたが、脳卒中とMSを対象とした研究では、ICFの3つの領域全てに渡るアウトカムを用いていた。ESは、脳卒中では無視できる程度から中程度、MSと小児では無視できる程度から大きい程度と様々であった。

### 7. レビューアの結論

このメタアナリシスの結果は、脳卒中やMSの成人や小児に対する治療介入として、ヨガは他の運動様式と比較して良くも悪くもないことを示すものであった。グループヨガクラスは典型的な社会的環境であり、身体の進歩やQOLに寄与する感情を高めることができ、CPを持つ人に有益である可能性がある。ヨガ、特にCPの子供と成人におけるより多くの研究は、豊かな恩恵をもたらす効果的で安全なヨガプログラムを作成するための貴重な情報を提供するだろう。